
とあるマフィアと科学と魔術と神と

鳩雅 瑠維

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるマフィアと科学と魔術と神と

【Nコード】

N8527Z

【作者名】

鳩雅 瑠維

【あらすじ】

V A R I Aで暗殺業をしていた神影はある日とあるの世界の人間と出会う。

V A R I Aでなぜか連絡がとれるのはフランという自分の後輩だけ。

——なんで他には連絡が届かないの？

突如少女の頭の中に流れ出した記憶。

それは少女に何を引き起こすのか——

登場人物（前書き）

これは「とある」と「REBORN」の混合小説です。
そついうのが苦手な方はお引き取りください。

登場人物

主人公

名前 瑛蓮 神影 （えいれん みかげ）

年齢 16

性別 女

性格 ボー……としている。

幻術の腕は高く、炎の純度も高い。他に雲が出せる。
正義感の欠片がほとんどなかったりする。

容姿 黒い髪に赤い目。綺麗系に入る。少し筋肉のついたスリル

な体系

能力 レベル4 幻術現実 （適当でなんて読むかは分かりませ
ん；）

有幻覚に似ている。
幻術で出したものを現実になす事が出来る。少し

その他 本人はまだ知らないけど神の上司に値する人だったりする。
V A R I A 雲の幹部。

V A R I A に戻れるよう試行錯誤をしている苦労モノ。

サブ？

名前 フラン

年齢 不明

性別 男

性格 毒舌蛙。キツイ一言が多い。

語尾がのびる。一人称「ミー」二人称「ユー（？）」

容姿 エメラルドグリーンの髪と目。少し童顔の少し女顔

能力 レベル不明 神の力

あるいみレベル6イッチャッテル能力。ほぼ

出番のない能力

その他 実はフランが神の上司の弟だったりしちゃったり。

VARIA霧の副幹部。マイモンがいる興味本位で世界をくつつけちゃった犯人。

名前 暗影 楓

年齢 不明

性別 女

性格 気まぐれ。怒るとヤヴァイ。

強情。欲が強かったり強くなかったり。フランの義姉。

容姿 神影そっくり

能力 フランとほぼ一緒

その他 神の上司であり復讐者の最高責任者でありフランの姉。

興味本位で記憶消して偽名使って弟のいる世界にいつてみ

ちゃった人

登場人物（後書き）

混合なのか混合じゃないのかわからない連載始めました；
どうなるんなこの連載？！

プロローグ（前書き）

とうとうプロローグです！

ブローグ

ザシュッ

いつも聞きなれた音が自分から出た感覚がする。

あるファミリーを潰しに来た私。いつも通り幻覚を使って手早く帰るつもりだった。

なのに……

「カハッ……ファミリーの奴ら……」

脇腹に激痛が走る。

普段のトレーニングでもそうそうに怪我しないものだからより一層痛く感じた。

グラッ

目の前の景色が180度回転した。真後ろは崖だったようだ。

（ああっ……打ちどころ悪かったら即死だね。いやだなあ、まだ私やりたいことたくさんあるのに……）

グシャッ

私の意識はそこで途切れた。

「あっちゃー……だから言ったのにー。記憶を消すのはまずいと思いますよーってさー」

後輩の声が聞こえた気がした。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了！

「あなたはどこから来たのですか？」とミサカは警戒しながら問い掛けます」

あれから何分たったかは知らないけど、私は生きていたようで、激痛はあるけど起き上がる事が出来た。

「あれっ……？どこだよ」

だけでもそこは崖の下ではなかった——誰かが助けてくれたのか？
どこかの屋上らしい。イタリアでは見られないような建物であったけど、不思議と日本であるのが分かった。

「いや、イタリアから日本ってどんだけだよ……」

私は起き上がって身の周りと方位を確認した。

ちゃんとボックスもあるし、指輪もある。服もヴァリアーのだし剣も銃も、あるうことかベルのナイフまであった。

「方位は……うん、真っ暗すぎるだろ」

下が明るすぎるせいかな星も月も見えなかった。少し雲が張っているから月は見えないんだろうけど。

——まずはここから降りよう。そう思った時、

「あなたはどこから来たのですか？」とミサカは警戒しながら問い掛けます」

真後ろから声がした。私は気配のない声に驚いて後ろを振り返った。気配が感じられなかったこの少女は何者なんだろう。ヴァリアーでも気配を読むのは得意な方だったのに。

なんて答えればいい？ なによりこの少女は裏の人間か？

「私は……イタリアから来た」

「イタリアといいますがマフィアと食べ物のおいしい国ですね。とミサカは思い出しながら答えます。しかしイタリアの方がなぜ学園都市に？とミサカは疑問を問いつけます」

裏というわけではなさそうだ。警戒の色も見られない。緊張した時の体の硬直も見られない。

「私は並盛という町を探しに来たんだ。それにしても学園都市とはなんだ？聞いたことがない」

とつさに考えた言葉。ボンゴレ十代目の故郷だという並盛。ボンゴレの人間ならだれでも知っている事。

この時ほどボンゴレが日本生まれなのに感謝した。

「並盛という地名は聞いたことがありませんね。とミサカが日本地図を思い出しながらいいます。学園都市をしらないとはさすが外国人ですね。とミサカは日本と外国の違いに関心をします」

うぜえ———そう思ってしまった私を誰も責めないでくれ。

「学園都市とは総人口230万人弱、東京都西部の大部分をしめる巨大大都市です。とミサカは説明を始めます。その人口の8割が学生という事から学園都市といわれています。と、ミサカは生徒の人数に驚きながらいいいます。その生徒達は超能力を発現させるための特殊なカリキュラムが組まされています。とミサカは実験を思い出しながらいいます。能力は「無能力（レベル0）」から「超能力（レベル5）」まであります。とミサカはあるレベル5を思い出しながらいいます」

一瞬私はこのまま笑ってもいいだろうか？と思った。これじゃあまるで「とある」の世界みたいじゃないか。

私の知っている日本にそんな都市はない。むしろ東京都には並盛がある。

そつえばミサカっていう人出てたね？20000人のミサカネットワーク。打ち止め（ラストオーダー）である200001号。

「ははっ………どういう事だよミサカちゃん」

「あなたはどこから来たのですか？」とミサカは警戒しながら問い掛けます」(後

ミサカちゃん到来！このミサカちゃんは9000何ぼかのミサカちゃんにしたいと思います。

「ていうか私の名前出てない」

ごめんね神影ちゃん。

次はフランと一方通行と黄泉川をだそうと思います。

ちなみに原作数カ月前って事で

神影ちゃんを上条と同じ高校に行かせたいですね。

最後に！これは一方通行orベル夢にしようと思う……

神影ちゃんみんなに愛されてるけどね^^

『そっだ、人間界にいこう』

あのあとミサカはどこかへ行った。

「私は9824号です。とミサカは神影に言っておきます」

私の名前も言った。ずっとあなたと呼ばれるのは嫌だしね。

あれから私はすぐに学園都市に関してよくわかるマップとかを探して買った。

あいにくと金に困りはしなかった。財布の中すごいし、ブラックカードもプラチナカードもある。

だけど一番気になるのはこの学園都市での？私”。

生徒として登録されているのだろうか？それとも不法侵入者になっているのだろうか。

「そういえば……携帯つながるかな」

プルルル——お掛けになった……

プルルル——お掛けになった……

プルルル——お掛けになった……

プルルル——ガチャッ

やっと繋がったー！

『はいもしもしー？』

「フラン？」

『あ、もしかして神影先輩ですかー？！今何処ですー？ヴァリアー総出で探してますよー？』

「うん……日本の学園都市って所にいる」

『学園都市ですねー……一応調べておきますー』

「分かった」

それにしても何故フランにだけ繋がったんだろう……

そういえば気を失う前にもフランの声が聞こえたような……

ズキン……—！

『そうだ、人間界にいこう』

『大丈夫さ、俺は最強なんだからさ』

『アハッ、元気だね』 『そんな事してどうなったっていうわけ？』

『時の使者あ？それになれって？』 『無理』 『じゃあ、遊ぼうよ』

『君は一人じゃない』 『この世にパラレルワールドなんて何億と存在するよ』 『あの馬鹿餓鬼はまた人間界に？』 『いじめられるって案外おもしろいね』 『この世に悪魔は存在するよ』 『だって俺はなつた事があるからね』 『守護者なんてものに縛られたくない』 『じゃあ死ぬば？』

『じゃあ教えてやるよ。俺の名前は—』

そこで私の意識はまた途絶えた。

きつと道端で倒れてるんだろう。

だって気を失う前に

「ちょっと！あんたどうしたじゃん？！」

て聞こえた。

て、これ黄泉川とおなじ語尾だよ……

『俺の名前は……暗影くらかけ 楓かえでだ。覚えておけ』

楓とはだれなんだろう。

『そっだ、人間界にいこう』（後書き）

一方通行出せなかった……（人・人）

神影の名前をやっと出せました！いやあよかったよかった。

少し意味不明だったかなー、言葉。

いつか番外編で書こうと思います！

『どこまでもゴーイングマイウェイな姉さんにカンパイ』

『なんで記憶をけしたのか、て聞かれてもこまるよね。俺は気まぐれな道化師だから』

——…ッフ

意識が戻ってきた。

目を開けて一番に飛び込んできたのは茶色いドア。その構造からしてみてもマンションのだろう。

「ここは……」

「あ、起きたじゃん？あのときどつしたじゃん？突然道路にぶつ倒れてさ」

目に映った自分よりとてつもなくでかい胸。うらやましいなクソ。

「お前誰だ？」

「初対面にその口調は気を付けた方がいいじゃん？まあいいけど…

…あたしは黄泉川 愛穂じゃん。『警備員』アンチスキルに所属とともにある高校の体育教師をしてるじゃん？あんたは？」

このボイナな女は黄泉川というらしい。しかしこいつに口調をアレコレ言われる筋合はないな。

「私は瑛蓮 神影。イタリアから来た。しかし私の記憶の中に日本に移動した記憶はない」

「きた覚えがない……？それってどういうことじゃん？一度ちゃんと調べた方がいいと思うじゃん」

「確かに、ということでお前が調べろ。私は学園都市を探検してくる」

「はあ?!」

まだ警戒を解かした訳ではない。しかし警備員なんて職業やっているとどうじゃない？有効活用さ。

黄泉川はよく見たら美人に入る成人女性だった。まあ、あの顔の女子高生がいたら引くけども。

「使えるものは使う。弱い者は突き落とせ。強者が正義だ。うん、さすがヴァリアー」

あの美人な黄泉川もじっくり使わせていただきますよ。

ゲーロー……先輩なに録ってんですかー。え、着信？——ブチッ

「フラン？」

『はいー。先輩。日本にを見つけましたよ学園都市ー。最近出来たよううでしてー、並盛の近くだったようですー』

「そう。で、なんで私は学園都市にいるんだ？」

『そうですねー、一種のトリップじゃないでしょうかねー。あ、今からヴァリアー総出で先輩の所行きますー』

「え、総出って誰よ」

『ええっと……ミー、墮王子、ロン毛隊長、マーモンさんですー』

ワオ。そんなに幹部が来て大丈夫なのか？いや、任務スクいないと無理でしょ、幻術マモ君とフランいないでどうするよ。

『ですけどー、そこ少し厳しいのでー、時間がかかりそうですー。ということと十分と学園都市を満喫してくださーい』

「え、ああ……分かった。ありがとう」

どこまでもフリーダムなフランに乾杯。

『どこまでもゴーイングマイウェイな姉さんにカンパニー』

また声が聞こえた気がした。

『どこまでもゴーイングマイウェイな姉さんにカンパーイ』（後書き）

黄泉川 『ゴーイングマイウェイすぎるじゃん神影……』

きつと黄泉川はそう思っている……はず！

また黄泉川とフランしか出せなかった……

どうにかしたい……

というわけでまだまだ続きます；

「9824号はどうした？もしかして死んだ？」

のほんと学園都市を徘徊中。にしても本当に学生の多いこと多いこと……

「あつりえねくらいに大人がすくねえ」

これ学生達どうやって暮らしてるんだ？あれ、ていうか今何時？暗いけど。学生に規則はないの？

どこかの裏道。頭の中の地図はもうすごいことになってまして。

「これはとてつもなくでかい……私の持久力もすごいけど……」

カレコレ5時間くらいは歩いてるんじゃないだろうか？いつも車だったしな……

フツと気配が後ろにある感覚がした。それは感じた事のあるようなないような……

「おやこれはこれはミサカちゃんじゃない？」

「ああ、イタリアからの迷子・神影ではないですか。と、ミサカは9824号の記憶をたどり思い出します」

ああ、9824号はどうしたんだろうな。死んだかな？違うミサカがいるってことは。

「9824号はどうした？もしかして死んだ？」

「正解です。よくわかりましたね。と、ミサカは予想以上に頭のいい神影を褒めてみます」

「予想以上って……で、違うナンバーのミサカちゃんはどうしたの？」

「9891号です。と、ミサカはナンバーを覚えておきます。これから実験を開始するのです。と、ミサカはこの裏道を指さしながら言います」

9891号。つまり67人のミサカは残念なことに会ってないのか。で、どんだけ寝てんの私。

「実験……ねえ。それでミサカちゃん達死んでるんだ？このままだと100000いきそうだけど」

「あなたは『死』に関してまるで慣れてるようですね。と、ミサカは目の前の神影を驚愕の目でみます」

だって私だけ人殺した事あると思ってんだよw

もう同情なんてとっくの昔に忘れたし。

「私は人を殺した事なんて何万とあるからね。なれないとさすがに精神壊れちゃうよ」

「なるほど、裏の職業の方なのですな。と、ミサカは見た目とは裏腹にとっても世界を知っている神影を見ながら言います」

失敬だな。これでも16年生きてるっての。ベルより早い、最年少でヴァリアーに入ったんだから。ちなみに5歳！

「まあ、入って11年だけど……—」

ゾワッ……—

殺気！

サツと振り返った所には真っ白な髪と肌。私とXANXUSと同じ赤い目。

「一方……アクセラ……レータ……通行……？」

「よオミサカちゃん？何を無駄話してるんですかア？」

『世界は何億とある！けど一つの世界は生きれるのかたった一回だよ。クローンだとしても、その世界に生まれるの一回だけだ』

「9824号はどうした？もしかして死んだ？」（後書き）

最後の最後で一方通行。

なんか最近反省する……

神影「つーかどんだけ寝てんの私」

はい；すみませんorz3

「最低な人間ですね。とミサカは神影に軽蔑の目で見ながらいいます」

Q、もしあなたがある実験の人物二人と会い、しかも今からその実験をやるといっています。あなたはどうしますか？

私は……

「よし、ミサカ9891号。君の勇姿は目にとめておくぞ。という事でLet's実験」

「え：実験をみるのですか？とミサカは神影の予想外の言葉に返答します」

A、見る

「うん、ここ数日死んだ人間見てないし」

「最低な人間ですね。とミサカは神影に軽蔑の目で見ながらいいます」

「うん、私最低な人間だもの。という事でヨロシク」

え、一方通行はどうしたって？ムシだよムシ。この私達のコント！いや、9891号は本気かw

「ええつと……ああもういいや！第9891回、実験を始めます！」

「ヤケになったなア……；まアいいけどよオ！」

実験が始まった。それにしても超能力ってすごいな・いや、人間超えてる人いっぱいみてるけどさ？

クローンでもちゃんと血が出て、ちゃんと逃げて、痛そうな顔して

こんななら辞めて！って叫べいいのに。泣けばいいのに。

ま、私なら辞めないけどさ。

「すごいねえ。まさか日本の技術がここまで発展していたなんて……イタリヤに戻ったら提案してみようかな？」

「ミサ、力は……この状況、で……そ、んな事を言、える神影が、すごいとお、もいます」

「あ、まだ話せたんだ。さすがだね。だけど……」

ミサカ9891号の後ろから足音が聞こえる。

「もう駄目っぽいね」

瞬間ミサカの体から血が噴き出した。

「実験終わり？ツマラナイナ。もう少し派手なの期待したんだけど」

「っーかア、あんたは誰なんですかア？」

目の前に来た一方通行。ミサカの血が服についてるね。私の方には来なかったんだけど。

「私は瑛蓮 神影。イタリアから来た。いまは確か……黄泉川とかいう人の家で世話になってるよ」

「ふーん。俺の事してたようですけどオ？」

「そりゃあ、有名だし。まあ、人殺しなのは少しばかりびっくりしたかな？」

あ、目が見開いた。真正面から人殺しってイワレタ事ないの？もしくは昔言われたとか？

「まあ、私はなんとも思わないけど」

今日の実験相手といたこの変な女。

突然人殺し呼ばわりされた。

実際そうだが……初対面で面というのは無神経じゃねエかア？

「ああ、私16歳ね。レータ君も同じくらい？見た目は中学生くらいだけど目の奥は成人超えてる勢いだもの。その中間の高校生って所でしょ」

ンなもんしらねエよ。

「知らねエ。ていうかいつから俺はレータなんて名前になったンですかア？」

「ああ、知らないのか。ま、同い年らへんと思っておこつ。レータはニックネームだよ。一方通行っていいづらい」

あっけらかンといいやがった……

「ま、これからヨロシク」

『俺は最低な人間じゃねえよ。ただ、人間の神経がわかんねえだけ』

「最低な人間ですね。とミサカは神影に軽蔑の目で見ながらいいます」(後書き

さて……どうでしょう。

神影ちゃんとミサカ9891号のコメントはどうだったでしょう、

うん……次は頑張ろう！

次回、黄泉川の所に戻ります。

「そ、そんな……未成年者がソロソロという危険地帯に……」

あのあと無事黄泉川の家に戻れた。それにしてもここの技術の進歩はすごい。学園都市内だけがここまですごいのか？

「この学園都市の技術はすごいな。元からパソコンの機能は良かったが」

「ん？いいに決まってるじゃん」でなかったらここまで人はいないじゃんよ」

いやあ、まあ、そうだけども。

「こんなウサギ小屋にこもってる精神は分かんないけどね」

「ウ、ウサギ小屋？！むしろあんたはどんな所に住んでたじゃん……」

どこ、ねえ……

「きつぱり言うとな。このマンション一室5個分以上の広さだったよ私の部屋は」

「お、お嬢様じゃんよ……神影、少し年齢偽って常磐台中学いくのと、普通にあたしの所の高校くるのどちらがいいじゃんよ」

……ん？。A。；

コウコウ？航行？孝行？……高校？

「高校ウウウウウウウウ？！」

「ウオ？！そ、そうじゃんよ；16歳で、高校も通わないで学園都市にいるのは不自然じゃんよ」

「い、嫌。もう私5歳の時から7ヶ国以上の語話せるよ？！運動神経なんて半端ないよ？！」

「それでもおかしいじゃんよ！という事でハイ！どっちジャンよ！」

こ、これでもヴァリアーの基準値の7ヶ国語を話し、この頭脳はヴェルデと一緒に研究をするほど！

な、なにより運動神経・反射神経・危機察知能力は抜群！

この前のは失敗したけどあれ以外任務の失敗もなし！

少しボー……としているが整理整頓、清潔率もヴァリアー内一！

5歳でこれをやったのけた私を……高校なんて未成年者がアハハウフフしている場所に？！

「そ、そんな……未成年者がゾロゾロという危険地帯に……」

「ど、どんな解釈をしてるじゃんよ；」

「ゴ、ゴホン……しゃあない……高校いつてやる！しかし条件がある！」

「おお、よかった……条件は何じゃんよ？」

「その一！私の仲間が迎えに来たらスグ辞める。」

その二！黄泉川、お前の家から通学！

その三！私の辞書に正義という文字はない

その四！少しでも不便な所があつたら黄泉川の高校少しずつ破壊する」

「ちょ、最後のは変じゃんよ！」

「いや、不便があれば壊す。そういうもんだよ。ザンザスがいい見本だね。」

「だけど日本では違うのか……」

「ウーン……ここじゃあ違うのか、じゃあ最後のはなしでいいよ」

「いや……どの国でもそんな習慣はないじゃんよ……」

「いや……この世には変わった国もあるんだヨ」

『たとえば俺がボスの国とかw?』

「そ、そんな……未成年者がソロソロという危険地帯に……」（後書き）

さて、ギャグ真っ盛りな今回となりましたが；

次こそ当麻？を！

次回、高校入学！

「たしかにアイドルだな。泣かせた奴はぶっ潰したくなる奴」

という事で高校という危険地帯に行くことになった私ですが……変な検査がありました；

これぞ学園都市クオリティーの勢いで機械どもにやられました。あ、今思い出してもゾワツと……

「神影のクラスは子萌のところじゃんよ。ここは問題児が多いじゃん……頑張れじゃん；」

「はぁ……なんか名前が可愛い先生でして……」

「いや、実際クラスのアイドルじゃんよ」

「先生がか?!」

いや、クラスのアイドルというのはそんなもんで決めていいのか。

コツンッ

ん？

何かが腰に当たった気がする。

「いたたっ……あ、あなたが神影ちゃんですね！神影ちゃんの担任の子萌です」

ピンクの可愛らしい物体が……！！！！

「か、可愛い……」

「み、神影。こいつが神影の担任の子萌じゃんよ」

えっ……………この可愛らしいマスコットが担任……………?!

「たしかにアイドルだな。泣かせた奴はぶっ潰したくなる奴」

「物騒な事言っただけじゃん……」

教室

「はい、今日は男の子万歳女の子の転入生ですよ」

「「「「うおおおおおおおおおおおお！！！！」」」」

ああ、ヴァリアーの男子共の方がマシだったな。

あいつらの第一声が「強いのか？」「女なのに使えるのか?!」「あつらゝいいわねえ」だよ。

「神影ちゃん、入ってきていいですよ」

「はい」

ガラッ

うわ、ヤベエ。未成年者のキラキラした目……暗殺時のベル以上にすごいよ。

「自己紹介をお願いします」

「えーっと……瑛蓮 神影。好きなものは……身を守るモノとか
らかいがいのある人。」

嫌いなものはキヤーキヤー騒ぐ奴とギヤーギヤー騒ぐ奴と、偽善者」

「神影ちゃんに質問はありますか?」

「レベルはなんですかー？」

おー、金髪サングラス？学生としてどうなんだ、それ。

「えーつと？」

「さっき渡された紙を読んでみてくださいー」

「ああ……ええつと、幻術現実っていうやつでー……レベル4？」

『俺ってもしかして最強？』

『いえー、最恐ですー』

「たしかにアイドルだな。泣かせた奴はぶっ潰したくなる奴」(後書き)

どうぞしょう、

がんばりました、自分。

次回、上条とお話？

「どこからきたの？」 「イタリア」

その後のクラスは少し騒がしかったね。

突然「うおえおえうあああああああ？！？！」て叫ぶんだもの。

それも子萌先生の泣き顔ですぐに終わったけど。

で、只今転入生恒例の質問攻め？

「どこからきたの？」 「イタリア」

「どうしてきたの？」 「気まぐれ」

「いつまでここにいるの？」 「仕事仲間が迎えに来るまで」

「仕事って？」 「いろいろと」

「学園都市初めて？」 「もちろん」

正直いつてチョー疲れる。まずどこぞの中学生がよコレ。

「おいおい、瑛蓮さん困ってるぞー？」

そうですねさま。隣の方は言い方ですねー。

「名前は？」

「ああ、俺？俺は上条 当麻。レベル0ね」

ふーん……

「あ、俺は土御門だにゃー」

「じゃあじゃあ僕の事は青髪ピアス、青ピって呼んでや」

一人目はトゲトゲ黒髪。二人目は金髪サングラス、三人目はそのまま青髪ピアスか。

「まあ……よろしく？」

「……よろしく／な／にゃー」

高校ってやっぱり未成年の危険地帯だな……自由すぎるぜ。

「~~~~は~~~~であって、~~~~なんだ。ここはしっかり覚えとけよー」

暇だ。ナニコレ暇すぎて困るんですけど。

「センサー」

「ん？瑛蓮かー、どうした？」

フレンドリーすぎるぜ

「もう知ってる内容で暇すぎて暇すぎてつまらないのでサボってますー」

「え?! ちょ、ま……」

ボタンッ

ここはヴァリアー入隊後9歳の時に書庫で読んだわ！

『姉さんフリーダムって言葉してますー？』
『んあ？俺に一番合
わない言葉だな』
『いや、一番合いますー』

「どこからきたの?」 「イタリア」 (後書き)

意味不明発現のオンパレードになりましたね；

んう…… (；――)

次回、原作突入? フランからの電話

「ゲコ太！」

次の日

只今私はクレープを食べる為屋台に寄っています。

いやあ、ここのクレープ屋さん種類が豊富豊富。

私はチョコバナナしか食べないけどさ。

「チョコバナナくださいーい」

「あいよー」

あ、一緒にゲコ太とかいうのが来ました。しかし私には必要ありませんねー、カエルなんていつも見てるし。

ゴミ箱投入しようk……

「あー！！何あんた捨てようとしてんの？！」

「はっ？」

何この少女。ゲコ太なんていいじゃん子供じゃないんだし。

「必要ないモノは捨てる。これが基本」

「だ、だからって私にはこなかったゲコ太を……！」

ああ……ゲコ太が大好きな幼稚な少女なのか。残念だったね。

「仕方ないな……では家に持って帰ろうか」

「えっ……」

え、なに？欲しいの？だけと言葉には言っていないよね。つまり欲しいと。

「何？家に持って帰れば私の所有物。どうしたって勝手にしょ？」

「そ、そうだけど……」

「何？欲しいの？欲しいなら言葉で表さなくちゃね」

え？ひどいって？欲しいなら言う。言っても貰えなかったら奪う。これが世だ。

「で？どうなの？」

「うう……ほ、欲しいです……」

「ん、じゃあほい」

ゲコ太を投げ渡す。

「ゲコ太！」

この子の顔が猫に見えた。

「て、さっきのミサカちゃんのオリジナルじゃね？」

うつわー意地悪されたって勘違いされたかな。

「ま、いいや」

ゲーロー……先輩なに——ブチ

「フランシー？」

『お、今回は早かったですねー』

「まあね。で、どうしたの？」

『あのですねー、日本に来たのはいいんですけどー、学園都市に入る入口が見つからないんですよー』

「え、空からは？」

『今それを実施中なんですけどー、ちょっと厳しくてですねー今ヴアリーアー情報部に連絡して弱い所とか探してるんですよー』

「いや、結界が張ってるわけないでしょ？」

『そのー、なぜか入れないんですよ。炎でもダメでー、シモンファミリーとかボンゴレ十代目に頼もうかなーなんて』

「まるでジャック……じゃなくて……ええと……テロ？」

『何マフィアに正論求めてんですかー？学園都市にいて少し甘ちゃんなりましたねー。帰ってきたら即任務いかせちゃいますー』

『まったく……フランを女にして人間界に送るところまでか弱くなる？』『いやー、心乙女になりますねー』『俺が男になっても全然かわんねーのに』『むしろどの男よりも男らしい……』

「ゲコ太！」（後書き）

次回。「緊急情報！外部からの攻撃を確認しました！」「何やってんのあいっら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8527z/>

とあるマフィアと科学と魔術と神と

2012年1月9日19時50分発行